



6月の映画会にご参加を

6月13日(土)には恒例の中国映画上映会を予定しています。今回は2009年制作の「再会の食卓」です。中国と台湾の歴史を背景に、食卓を囲む人びとの人生を描きます。2010年ベルリン国際映画祭で銀熊賞(最優秀脚本賞)を受賞した名作をぜひご覧ください。

おなじみの岡崎雄児(元中京学院大学教授)さんによる映画解説も楽しみです。



詳細は別紙チラシをご参照ください。

万一、会場の都合などにより中止となる場合は本会ホームページ(下記 URL)にてお知らせいたします。

<http://nicchushounan.sakura.ne.jp/>

二エ・アル記念広場 清掃活動

7月6日(月) 午前10時30分～

※毎月第一月曜日に、有志が、中華人民共和国の国歌「義勇軍行進曲」の作曲者である聶耳(二エ・アル)の慰霊記念碑のある広場を清掃しています。聶耳は1935年7月17日に、遊泳中、鵠沼海岸で亡くなりました。
※小田急線・鵠沼海岸駅下車・徒歩7分
※どなたでも、手ぶらで参加できます。

新型コロナへの対応

■4月講演会

4月18日に予定していた「聶耳(二エ・アル)没後85周年記念・講演と音楽のつどい」は会場が使用停止となったことを踏まえ、感染リスク回避の観点から中止・延期といたしました。日本における二エ・アル研究の第一人者である岡崎雄児(元中京学院大学教授)さんによる講演と二エ・アルゆかりの楽曲を聞くことのできる稀有な機会ですので、年内に開催することを計画中です。

■大会・総会

新型コロナ感染症の影響を受けて、日中友好協会は5月に予定されていた全国大会と6月に予定されていた神奈川県連合会の大会を延期しました。湘南支部の定例総会は、現時点では8月8日(土)に開催する予定です。

■支部役員会

湘南支部では3月27日には会議室を使えない状況下でも喫茶店にて役員会を開催しました。緊急事態宣言発出後の4月18日と5月2日には濃厚接触と移動のリスクを回避するために、県内でも最先端を走る「オンライン会議」を開催しました。インターネットで参加できない役員とは電話回線をつなぐという工夫も試みながら、無事に議題を論議できました。今後の会議の持ち方にも参考になる経験でした。



会員募集中!

「日中友好新聞」をご購読くださる人を増やし、会の活動を支えて日中友好運動に貢献しえくださる方を募集しています。

新入会員のひと言～

川崎典子さん

1990年に初めて台湾に行き、一人で台湾最南端国立公園のガランピ岬で太平洋・バシー海峡・南シナ海と、青さが3種あると知った時が始まりで、1992年から2000年まで例年10ヵ月ずつを台北と高雄で過ごしたので、少しばかりの台湾の事を思い出し、これを書く事とします。

最初に台北に住んだ時にはまだ、台湾在住の日本人にタクシーに乗ることを注意されることが多かった。1947年2月28日の2・28の後遺症である(※注)。今更2・28事件などを持ち出す事ではないが、それから後の戒厳令・監視社会の出現と色々あって、1987年にそれが解除され、1984年李登輝副総統、1988年の李登輝総統が選出されるまでの苦難である(今は台北の総統府前に2・28和平記念公園がある)。それは日本敗戦後の台湾の歴史と民心を強固なものにした。1992年には総選挙が行われ、野党である民進党が結成され、やっと2000年に野党の民進党・陳水扁総統を実現したのである。

今の台湾は完全な民主主義体制である。大通りをデモ隊が行進するとデモに賛成のタクシーは手を振りクラクションを鳴らす。通行中の人でも参加が続く。選挙の時は各家を訪問し説得する(私も説得にあった一人である)。

昨年末からの香港の民主化を求める抗議行動を見ていると、台湾の人たちが蔡英文総統を選んだのが当然であったろう。また中国大陸奥地へのただ数回の旅行では、各地域の文化が大切にされていないように感じて、とても寂しかった。だからこそ、台湾の民主主義が国際的にも知れ渡ってほしいと思う事、切である。

(※編集者注)

「2・28事件」は国共内戦に敗れて台湾に逃げ込んだ中国国民党支配層による、日本の敗戦以前から台湾に住んでいた人たちへの白色テロ。文中では事件当時に日本人や日本文化への弾圧も厳しかったことを背景としていると思われる。

中国の医療従事者支援

(時事通信社「金融財政ビジネス」2020年5月11日号より～日中福祉プランニング代表・王青

【洞察☆中国】より抜粋)

◆「この国の英雄だ」

いろいろな医療物資が続々と送り込まれた。地元武漢の飲食店の若き経営者らは、毎日無料のお弁当やコーヒーを病院に配達した。自家用車で医師や看護師の運転手役を務めた人も多かった。



「われわれのできることはこれしかないが、少しでも力になれば」と語った。また、遠征している医療従事者の家に残っていた子どもや親への支援も行った。

「われわれのできることはこれしかないが、少しでも力になれば」と語った。また、遠征している医療従事者の家に残っていた子どもや親への支援も行った。

これらのさまざまな支援や激励の言葉が、どれほど医療従事者を勇気付け、心の支えとなったことか。「あなたたちを一人にしない。14億の人民がついているのだ」という声が広く響いた。

「英雄」も生身の人間であり、国に尽くすが、自分の生活がある。武漢から戻って来た医療従事者に対して、さまざまな形の慰労と奨励は手厚かった。

国が規定する特別手当のほか、地域によって金額が異なるが、奨励金として5万～20万元(75万～300万円)の現金が支給された。

◆多方面にわたる優遇

また、14日間の有給休暇と高級ホテルを用意したり、年間無料の映画鑑賞カードや観光地無料入場券などを贈呈したりする自治体や民間企業が続出した。

そして、恩恵は本人に加え、家族にまで及んでいた。地元飲食店の無料食事券を家族に提供したり、介護施設が医療関係者の親の入居に対して、費用の減免や優先措置を取ったりした。

これまで、中国の医者と患者の関係は険悪で、社会問題として取り上げられるほどであったが、新型コロナとの闘いを通じて、改めて医療従事者の重要性が再認識されるきっかけとなったことは間違いない。